

チェーホフ作品における家族像（1883-1885）

The family image in Chekhov's works (1883-1885)

内田健介

UCHIDA Kensuke

要旨 本稿の目的は、作品に描かれた家族関係を分析することで、チェーホフが抱いていた家族像を明らかにしていくことである。チェーホフは生涯を通じて数多くの短編を執筆したが、本論文では彼が主にチェホンテというペンネームを用いていた時代、1883年から1885年にかけて創作された作品に描かれた家族関係の分析を行った。この時期には数多くの短編が創作されているにも関わらず、家族関係を扱った作品は非常に少ない。その要因には、雑誌の編集者による影響傾向があると考えられる。また、この時期に初めて子供の視点が作品に描かれるようになる背景には、彼が日常の様々な出来事を作品の素材としていたことから、大学を卒業し医師として働き始めた事が影響している。また、この時期の家族を扱った作品が少ないとはいえ、彼の作品に特徴的である、家族関係に金銭が関わったときに不幸を招くことは変わっていない。

はじめに

本論文では1883年から1885年にかけてチェーホフ作品の中から、そこに描かれた家族像に注目して分析を行う。チェーホフは1880年から執筆活動を始めたが、作品を本名ではなく幼少時のあだ名「アントーシャ・チェホンテ」で発表していた。初めて彼が本名で作品を発表したのは、1886年2月15日の『追善供養』«Панихида»においてである。この作品が発表された雑誌『新時代』«Новое время»は、それまでペンネームで発表していたユーモア雑誌とは違い、格式の高い雑誌であった。つまり、この雑誌へ作品が掲載されたことで、チェーホフはユーモア短編作家から、本格的な職業作家として階段を一段上ったのである。そこで、この作家として成長していった1883年から1885年までを一つの期間として本論文では扱っていく。

チェーホフが作家として活動し始めてから約2年後の1882年10月、彼の人生における一つの転機が訪れた。友人の紹介によって雑誌『断片』«Осколки»¹の編集者レイキン²と知り合ったことで、雑誌『断片』に作品を投稿するようになったのである。もともと作家として活動していたレイキンは、これまでの作品からチェーホフの才能を認め、自分が編集者を務める雑誌へ寄稿を要請した。こうして一つの雑誌との強い結びつきを得たチェーホフは、これ以降書き上げた短編の大半を『断片』へ寄稿することとなる。

レイキンと出会うまでのチェーホフは、作品を執筆して様々な雑誌に投稿するという形式を取っていた。つまり、作品を送った後は雑誌編集部に掲載許可を待つ立場だったので

¹ 1881年から1916年までペテルブルグで発行された挿絵入りユーモア雑誌。

² И. А. レイキン（1841-1906）。1860年代ユーモア作家として活躍し、長編、中篇、短編、戯曲を創作。1882年から『断片』の編集長兼発行人となる。

ある。しかし、雑誌『断片』では編集部からの要請によって、作品を創作して送るという立場に変化した。これによりチェーホフはユーモア作品を投稿する大学生から、一人の短編作家³になったと言えるであろう。1882 年 11 月 20 日『首になった』«Нарвался» が初めて雑誌『断片』に掲載されて以降、チェーホフとレイキンの付き合いは 1892 年に発表された『魚の恋』«Рыбья любовь» まで 10 年もの間続いている。

また、チェーホフにとって執筆活動は、その活動によって得た賃金で家族を助ける⁴という意味も持っていた。そういった背景からも、作品を定期的に投稿でき、原稿料⁵を手に入れられることは願ってもない出来事であった。

1. 雑誌『断片』

こうして作家として確かな活躍の場を得たチェーホフは、この 1883 年から 1885 年にかけての期間に数多くの短編作品を創作した。1882 年に 4 篇、1883 年に 75 篇、1884 年に 87 篇、1885 年には 42 篇の短編が雑誌『断片』に掲載されている。他の雑誌も合わせれば、発表された作品総数は 245 篇⁶という驚くべき数字である。

しかし、チェーホフは雑誌『断片』という確かな活動場所を見つけた後も、『見物人』«Зритель»⁷や『目覚まし時計』«Будилиник»⁸といった他のユーモア雑誌に作品を投稿し続けている。こうした他の雑誌に作品を投稿していた背景には、編集者レイキンからの作品に対する多くの注文が関係していた。まず、レイキンは雑誌『断片』に作品を投稿する際には、100 行以下で作品を書くことを義務付けていた。この字数制限はチェーホフを苦しめ、一度レイキンに対して制限を広げてくれるように要望している（1883 年 1 月 12 日レイキン宛）。チェーホフはあまりにこの制限を気にし過ぎたために、何度か創作を中断せざるを得ない状況に陥っていたのである。

また、レイキンの注文は文章量だけにとどまらず、作品の内容にまで及んでいた。彼はユーモアを含んだ作品を送ってきて欲しいとチェーホフへと注文をつけていたのだが、このユーモアはレイキンの考えるユーモアであり、チェーホフの考えるユーモアとは隔たりのあるものであった。チェーホフ自身こうした状況から脱するために、レイキンに対して、「ユーモアを追いかけまわすことで、いつしか胸が悪くなるような作品になってしまう」と送っている（1883 年 4 月 17 日以後、レイキン宛）。ユーモア作家としての地位と確かな収入を得たチェーホフだったが、代わりに自由な創作環境を失ったのである。

しかし、こうしたレイキンの作品に対する拘束も、他の雑誌に投稿する作品には関係がなかった。チェーホフは、レイキンの意にそぐわず『断片』から掲載を拒否された作品を

³ チェーホフは作家として先輩であった兄に対して「『断片』で仕事をするのは、証明書を持つことに等しいことです」と語っている。

⁴ チェーホフの家族は父親が作った借金のため、故郷のタガンローグを追われモスクワに夜逃げしている。家計は苦しく弟イワンや妹マリアの学費は学生だったチェーホフが工面していた。

⁵ 『とんぼ』では 1 行 5 コペイカだった原稿料が、『断片』では 8 コペイカへと上昇している。

⁶ この数字は単純に創作作品に限ったものである。チェーホフは短編作品以外に無記名で執筆していたモスクワの街についての情報やコラムなどは数に含まれていない。

⁷ 1881 年から 1885 年までモスクワで発行されていた挿絵入りの文学、芸術、ユーモア誌。

⁸ 1865 年から 1871 年までペテルブルクで、1873 年から 1917 年まではモスクワで発行されていた挿絵入り風刺雑誌。

他の雑誌にそのまま送ったり、最初から『断片』に送ることを避けた作品も何点か存在している⁹。それゆえ、雑誌『断片』に掲載された作品と他の雑誌に掲載された作品では、その内容にレイキンの制約によって生まれた違いが請じている。それは家族関係を扱った作品においても同様であると考えられる。そのため、雑誌『断片』に掲載された作品と、他の雑誌に掲載された作品を区別して分析を行っていく。

この時期の作品総数は245篇と非常に数多くあるのだが、一つ一つの作品を丹念に見ていくと家族関係を扱った作品が極端に少なくなっていることが分かる。245作品のうち、家族や家庭を舞台にした作品は、わずか10作品である。1880年から1882年にかけて35作品中7作品において家族関係が描かれていたことと比較すると、大きな違いである。また、その10作品の中で雑誌『断片』に掲載されたのは5作品である。この時期以降の1886年以降の作品においては家族を扱った作品が増加するため、この1883年から1885年の時期に何らかの関係があるのではないかと推察される¹⁰。他にもこの時期には家族を題材とした作品が厳しい検閲の対象になっていたため¹¹、この影響も大いにあったであろうがこれ以降の時期には再び1882年までのように家族が題材として取り上げられていくため、まず雑誌という媒体に注意を向けて分析を行っていく。

では実際の作品の中に描かれた家族について分析を行っていききたい。この時期、最初に家族を扱った作品が『こらえ切れずペテン師に』《Мошенники поневоле》である。この作品は『断片』ではなく、1882年12月31日の雑誌『見物人』に掲載されている。

作品の発表が年の終わりであるが、作品の中の時間もまさに新年を迎えようとする数時間前である。新年を待ち望む人々がある屋敷へ集まり、客人達は女性についての議論や哲学談義、ロトなどを行って騒いでいる。そんな新年を迎えるためのパーティなか、招待した側のチャーデチキン一家は落ち着かない様子で新年が訪れるのを待っている。そうした一家の行動が喜劇的に描かれた作品である。

主人のチャーデチキンと息子のグリーシャは、客人達の輪にも加わらずにただただ新年が訪れるのを待ちわびている。なぜならば、新年になれば酒を飲み始めることが出来ないためである。どうしても酒を飲みたくてたまらないチャーデチキンは、繰り返し台所にいる妻のもとに向かうが、妻のマラーシャは新年になるまで待つようにと相手にしてはくれない。時計の針は11時8分を指しており、新年まで52分もある。酒が飲めるまで52分と親子は、なかなか進まない時計の針とにらめっこを始める。当たり前だが、時計は正確に時間通りに進んでいる。親子はそんな時計を苦々しく眺めながら、この世で酒を待つことほど辛い事はないと考えている。

そして、ついに我慢の限界に達して新年を待ちきれなくなったチャーデチキンは、時計の針を5分間進めてしまう。この行動に息子のグリーシャも続き、同じように7分間針を進めてしまう。こうして新年を待ちきれない人々が次々に時計の針を進め、新年までの52分はあっという間にわずか11分になってしまった。これで念願の酒にありつけると

⁹ Евсеев Д. М. «Среди милых москвичей»: Московский быт глазами Чехова-журналиста. М., Гилиос АРВ. 2007. С. 7.

¹⁰ 1881年のアレクサンドル2世暗殺以降、雑誌に対する検閲が強まり、チェーホフの作品も検閲によりいくつか掲載不許可になっているが、この時代以外には家族作品が多く創作されていることから、検閲による影響だけではなく雑誌『断片』との関係があると考えられる。

¹¹ R・ヒングリー（川端香男里訳）『19世紀ロシアの作家と社会』中央公論社、1984、276頁。

チャーデチキン、妻に新年まで残り10分程であることを告げる。しかし、新年の訪れと同時に料理を完成させるつもりで料理の仕込みをしていたマラーシャは、突然時間が進んだことに困り果ててしまう。しばらくの間どうすべきか悩んだ彼女の取った行動は、時計の針を戻すことであった。これがこの作品の大まかな筋である。

このように『こらえ切れずペテン師に』は新年までの時間を巡り、時計の針を中心に家族の攻防を描いた笑い話である。父親も息子も時計を進めるという行為を行い、最後には母親に進めた時計の針を元通りに戻されてしまう。父親、子供、母親、それぞれが時計の針を動かすことを悪いことだとは思っているが、自分たちのために行動してしまう。しかし、最終的に時計の示す時間が元通りになってしまうという結末によって、家族の中でのバランスが保たれた作品になっている。父親や子供の時間を戻すという行動を面白おかしく描いた、非常に明るい雰囲気のある作品である。

非常に短い作品だが、時計を動かしている息子を父親が見つめる場面で次のように表現されている。「彼は時計のある子供部屋にいった。すると、彼の親としての心にとって感心できない光景を見つける。時計の前にグリーシャが立ち、針を動かしているのである」¹²。この後、父親は息子を叱るのだが、その動機が親の心と表現されている。結局は父親が針を動かしてしまうが、この親の心という表現があることから、チャーデチキンの行動は息子の不正を肩代わりした行動と捉えることも出来る部分である。

次に家族関係が描かれた作品は、1883年1月8日の『見物人』に掲載された『喜び』«Радость»である。作品の始まりは真夜中の12時。家族が寝静まったところに突然長男のミーチャが息を切らしながら飛び込んでくる。急なミーチャの訪問に両親と兄弟たちは驚き、父親は息子に何があったのか尋ねると、興奮したミーシャは新聞に自分の記事が載り、今ではロシア全土で有名になったのだと家族に向かって自慢をする。その話を聞いた家族はミーシャがどんな素晴らしい記事で新聞に載ったのだろうと期待しながら話を聞かすが、話を聞いてみると、新聞に載った内容は彼が酔っ払って交通事故にあったという記事であった。つまり、彼は新聞の中の笑いの種として有名になったのである。家族があっけにと取られているなか、ミーチャは新聞に載った喜びを友達へと知らせるため、家を飛び出していく。

この『こらえ切れずペテン師に』と『喜び』は、ともに家庭を舞台にした笑い話であるが、この2作品は『断片』ではなく『見物人』に送られている。ここには、レイキンからの作品に対する注文が影響していると考えられる。どちらの作品も文章の長さは『断片』に掲載されている作品と比べてもほぼ同じであり、字数制限によって他の雑誌に送られたわけではない。それゆえレイキンとチェーホフのユーモアの質の違いが、作品を『見物人』に送らせたのではないだろうか。

そこで違いをはっきりさせるために、雑誌『断片』に掲載された作品の家族像と比較を行いたい。雑誌『断片』において家庭や家族関係の登場する最初の作品は、1883年3月12日の『兄さん』«Братец»である。

この作品には、妹の結婚について議論する兄と妹が描かれている。なぜ兄が妹の結婚に

¹² Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Сочинения. Том 1. М., Наука. 1983. С. 474.

口を挟むのかということ、妹が金のために結婚を決めたためである。結婚相手は悪い噂の絶えない男で、結婚したとしても幸せになれないことは兄からすれば明らかである。しかし、妹は兄の説得に耳を貸さず、考えを改めようとはしない。妹はかつて裕福な貴族として暮らしていたことが忘れられず、今の落ちぶれた状況を変えるために結婚を決意したのである。このような妹に対して、兄も諦めずに話を続けていくが、そのとき結婚相手からお茶や砂糖、コーヒーなどの嗜好品がプレゼントとして贈られてくる。賄賂などに屈しはしないと口にする兄であったが、それ以降彼は妹の結婚に対して反対することを止めてしまう。

金のために結婚する妹、口では綺麗事を並べるが現実には欲望に負けてしまう兄、かつて貴族だった2人が風刺された作品である。

次に『断片』において家族関係を扱った作品は、1883年5月7日に掲載された『古典科中学生の災難』«Случай с классиком»である。中学校に通う少年ワーニャの試験結果に対する母親の態度が描かれている。

試験に落第してしまったワーニャが、そのことを母親に打ち明けると、彼女は息子を罵り始めてしまう。ワーニャは必死にテストの問題が難しかったことを説明しようとするが、そんな事に母親は関心を持たず、出来の悪い息子を持った自分はなんて不幸なのだろうと口にする。見るに見かねた叔母が仲裁に入ろうとするが、母親は聞く耳を持たずに息子を鞭で打たせた後、学校を辞めさせられて奉公に出されてしまう。

この作品で描かれた母親は、息子をまるで自分の所有物のように考え、子供の苦しみになど目を向けず、ただ自分の受けた不利益ばかりを呪うどうしようもない存在である。しかも、子供を鞭で罰する際には、隣の部屋に住む男性に任せ、自分の手を汚そうともしない。

次に扱うのは1884年2月11日の『断片』に掲載された短編、『家庭教師』«Репетитор»である。この作品にも『古典科中学生の災難』と同じくラテン語に苦悩する少年が登場するが、主人公は生徒側ではなく、彼に勉強を教える家庭教師の方である。

こちらの作品に登場する少年もラテン語の変化が覚えることが出来ず、家庭教師は手を焼いている。すると、そこに少年の父親が現れ、勉強の出来ない息子を鞭で打とうとする。家庭教師は父親が居ても勉強の邪魔にしかならないので、早く部屋から出て行って欲しいのだが、父親はなかなか出て行こうとしない。そのため、家庭教師は父親が居る前で授業を続ける。そして、ラテン語から数学に科目が移り変わったとき事件は起きる。家庭教師は数学の問題が解けなくなってしまうのである。すると、その家庭教師が解けなかった問題を商人の父親がいとも容易く解いてしまう。教える立場でありながら問題の解けなかった家庭教師に対して親子は優越感を感じ、授業は終わる。最後、家から授業料を貰って帰ろうとする家庭教師に対して、父親は様々な理由を並べ持ち合わせがないと言って決して払おうとしない。結局、家庭教師は授業料を貰えずに帰っていく。

さて、雑誌『見物人』と雑誌『断片』に掲載された作品の中から、家族の登場するものを『こらえ切れずペテン師に』、『喜び』、『兄さん』、『古典科中学生の災難』、『家庭教師』の5作品を見てきたが、前半に扱った2作品と後半に扱った作品には違いがあることが分かる。前半の作品が非難されるべき存在のいない、単純な笑い話であるのに対し、後半の3つの作品にはそれぞれ登場人物に対する皮肉が込められた作品になっている。『兄さん』では金のために結婚する妹、口先だけの兄、『古典科中学生の災難』では思い通りになら

ない息子を鞭で打ち奉公に出してしまう母親、『家庭教師』では金を払おうとしない父親、彼らは明らかに読者に不快感を与える存在であり、風刺の対象となる登場人物である。チェーホフがレイキンの注文に対して、胸が悪くなるといったことは、このような不快な人物を作品の中に描くことに対してだったのではないだろうか。

そして、『古典科中学生の災難』や『家庭教師』で親が体罰として鞭を使うのは、これ以前の作品『パパ』や『奥さま』にも見られ、チェーホフの描く家族関係の一つの特徴である¹³。また、『断片』誌における作品では、必ず金銭が物語に関わっているという特徴も持っている。『兄さん』では経済的な理由から結婚する妹、『古典科中学生の災難』では、ワーニャが奉公に出されてしまった原因は彼が学校に通ったとしても何の収入も得られないためである。『家庭教師』においても、生徒の父親が授業料を家庭教師へ払わない結末が描かれている。チェーホフは作品を描く際、登場人物を不幸に導く原因に経済的要素を物語に絡める傾向があり、それは彼の作品全体に通じた特徴である。逆に経済的な問題が関係しない『見物人』の2作品は非常に明るい作品である。

1885年12月、レイキンに連れられて初めて首都ペテルブルクを訪れたチェーホフは、ペテルブルクの作家たちに熱烈な歓迎を持って迎え入れられた。それは首都ペテルブルクでは、アントーシャ・チェホンテが人気作家として知名度を得ていたことを示していた。そのときチェーホフは兄へ喜びを伝えるとともに次のように書いている。「これまで無頓着に気軽に書いてきたことが恐ろしいくらいです。もし知っていたら、あんな風に注文で書いたりしなかったのに」¹⁴。この注文が、レイキンからの注文を意味しているとすれば、レイキンの注文に従って書いた作品を、チェーホフは快く思っていなかったことになる。このことは、『断片』に送られた作品の家族像と、『見物人』に送られた作品の家族像を比べた場合にも、その違いから読み取ることができる。

2. 雑誌『ペテルブルグ新聞』

レイキンに出会ってからは雑誌『断片』にほとんどの作品を投稿していたチェーホフであったが、1885年半ば頃から投稿先に変化が現れ始める。彼はレイキンに対して、雑誌『断片』のような小編より長めの文章を書きたいと要望を出し、レイキンの紹介で雑誌『ペテルブルグ新聞』«Петербургская газета»¹⁵に作品を投稿するようになっていく。1885年5月6日の『最後のモヒカン女』«Последняя могижанша»が掲載されてからは、多くの短編作品がこの雑誌へと投稿されるようになった。同時にこれまで短編の投稿先の中心であった『断片』への投稿は、『ペテルブルグ新聞』への作品投稿の増加に並行して減少している。

この『ペテルブルグ新聞』は、本名で作品を投稿するようになった1885年以降も続き、1887年までチェーホフの短編の投稿先の中心的な雑誌となった。なお、作品の投稿は1892年まで断続的に投稿が続いている。

¹³ これ以前の作品におけるチェーホフ作品の家族像については、拙稿「チェーホフ作品における家族像 1880-1882」（『人文社会科学研究』千葉大学人文社会科学研究科、2008、210-222頁）を参照のこと。

¹⁴ 書簡 1886年1月4日、兄アレクサンドル宛。

¹⁵ 1867年から1917年までペテルブルクで発行された政治、文学新聞。

1885 年において『ペテルブルグ新聞』に掲載された作品は 36 篇あり（『断片』に対しては 42 篇）、家族関係が描かれた作品はその中に 2 つである。まずはこの 2 作品の家族関係を分析していきたい。

最初に扱うのは、1885 年 8 月 26 日に発表された『一家の父』«Отец семейства» である。昨晚賭け事で負けて機嫌の悪い父親が、家の中で会う人間に対して次々と当り散らす物語である。

屋敷で暮らす家族全員が食堂に集まり、食事をしている最中も怒りが収まらない父親のジーリンは、まず妻に対して怒りの矛先を向け、妻が作った料理に対して文句を付け始める。その後、食卓に居合わせた他の人物にまで火の粉は飛び、最後にその標的となったのは彼の 7 歳になる息子フェージャであった。

幼いフェージャには機嫌の悪い父親が恐ろしく、泣き出してしまう。すると、ジーリンの怒りはさらに増し、息子から食事を取り上げてしまう。しかも、彼は 7 歳の子供に対して養育費がかかるだけで生きているだけ迷惑だという話を始めるのである。母親はそうした状況に耐えきれず、泣きながら食堂を飛び出していく。ジーリンは妻が食卓から立ち去ったあとも、食堂にいる人間に向かって気が済むまで自分の正当性を主張し続けたのちに去っていく。その後、気分の落ち着いた父親は、自分が食卓で行った振る舞いや言動が恥ずかしくなるが、プライドの高さから家族に対して謝罪をすることができない。あの日以来、息子のフェージャは父親が恐ろしくなり、怯えて接するようになってしまう。

この作品に登場する父親は、自分の子供に対してかなり辛辣な言葉を投げつけている。その中でも特に酷いのが、「お前は、自分がお父さんにとってどれだけ高くついているのか知っているのか？¹⁶」という発言である。賭け事に負けて金を失っているとしても、子供には何の関係もないことであり、7 歳の少年に対して生活費がかかるなどと責めるのは常軌を逸した行為である。フェージャもこの言葉で泣き出し、耐えきれなくなった母親も食堂を出て行ってしまう。さらに、ジーリンは最後に「これ以上あなたのしつけに口を挟みません¹⁷」と捨て台詞を残して去っていく。この文章では、相手を示す表現が親密な間柄で使われる（ты）ではなく、よそよそしい「あなた」（вы）という代名詞が使われ、もはやお前は家族ではないという父親の感情が含まれている。

こうした表現方法の区別は、会話においてだけでなく、主語を表す言葉においても用いられている。チェーホフは作品に自分の意志を書かなかったと言われるが、この人物を示す言葉に注目すると、彼が登場人物に対してどのような感情を抱いていたのかが見えてくる。例えば、この作品においてジーリンは父親という立場にあるのだが、物語を見ていくと彼は（отец）という言葉を使って表現されていないのである。では、どのように表現されているのかというと、わざわざ親（родитель）という表現が使われている¹⁸。この親（родитель）という言葉は一般的には、複数形の両親（родители）という形で用いられ単数形では用いない。チェーホフはそうした言葉でわざわざ表現することでジーリンという人物が父親に値しない人物だと表現しているのではないだろうか。そして、物語の結末

¹⁶ Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Сочинения. Том 4. М., Наука. 1976. С. 114.

¹⁷ Там же. С. 115.: «Я больше в ваше воспитание не вмешиваюсь.»

¹⁸ Там же. С. 114.: « Не то еще тебе будет! - продолжает родитель.»

部分でジーリンは自分の行為を恥ずかしく思い、息子に対して優しく接しようとしているときだけ彼は父親と表現されている。それゆえ、日常的に彼が家族に対して傲慢な態度を取り、客人にも無礼な態度を取っているわけではないことも示されている。

しかし、そうした父親の変化は若いフェージャには分からない。ジーリンが一時的に行った行為も、子供の心には深く刻まれてしまうのである。一見すると単に理不尽な父親を描いただけのように見える『一家の父』だが、こうした部分に目を向けると子供にとっての親という存在がしっかりと描かれている事が分かる。

また、この作品においてジーリンが不機嫌になったきっかけは、賭け事に負けたことである。つまり、これまでの作品でもそうだったように金銭によって家族の関係が裂かれてしまっている。さらに、フェージャを最も傷つけた言葉は、彼が金食い虫だという台詞であった。こうした経済的要因によって家庭内に不幸が生じる特徴はこの作品においても変わっていない。そして、これまでの作品においても特徴的であった、子供の視点が欠けている点も同じである。登場するフェージャは物語で一言も喋らず、彼の感情が表現されることはない。泣き出してしまったことや、震えながら父親の話を聞くなど、全て彼の行動だけが表されているだけである。

次に家族関係を見ていく作品は、1885年12月8日に発表された『愚直』《Святая простота》である。この『愚直』には、年老いた父親と息子の再会が描かれている。父親は教会の長司祭を勤める神父であり、対照的に息子はモスクワで活躍する高名な弁護士である。この息子は、大学に入るために家を出たあと、15年ものあいだ家に帰っておらず、彼が久しぶりに家に帰ったところから物語は始まる。

最初、親子は15年ぶりに一緒に食事をしながら、会話を交わしていく。息子は出された料理の美味さに感動し、父親は息子が立派になって帰ってきたことに感動している。父親は会話の中で、息子が弁護士になったことを知り、いったいどれほど稼いでいるのかを知りたいのだが、久しぶりの再会を金銭についての話題で水を差すのに遠慮して聞くことができないでいる。すると、息子はチケットが一枚も売れずに公演が中止になった劇を、自分で客席全部のチケット代を買い取り演じさせた、という話を父親にする。父親は息子が嘘をついていると思って信じないが、息子が話していることは真実である。この話をきっかけに父親は聞いたかった収入を息子に尋ねると、息子は弁護士として年に2万ルーブル以上稼いでいると答える。途方もない金額を言われた父親は、これも嘘だと思って信じないが、息子はモスクワで一番の弁護士になり、実際に2万ルーブルの年収を得ているのである。それから息子は父親の予想を超えた範囲の話をしていくのだが、父親は久しぶりに会った息子は冗談話が好きになったものだとしか思わなかった。

食事が終わると、それぞれ父と息子は寝室へ向かうが、まだ話し足りない父親は息子の寝室に行き、あれこれと世話を焼き始める。何年経っても、どれだけ息子が成長しても、彼にとってはまだ子供のままなのである。信心深い父親は先ほどの話の中で息子が冗談を言ったことに対して、嘘をつくのはいけないことだと忠告する。しかし、息子は事実を言うただけで、嘘などついてはいないため相手にしない。毎日仕事に追い立てられ、今も寝室でも仕事をしている息子は、あれこれと話をしようとする父親が次第に疎ましくなり、ついには追い出してしまう。その後、深夜になってから父親はもう一度息子の寝室を訪れる。もう年老いた自分はいつ死ぬか分からず、息子と再び会えるかどうか分からない。その

ため、これまで少しずつ貯めてきた 1500 ルーブルを息子に与えようとする。1500 ルーブルもの大金が貰えて喜ぶだろうと思った父親であったが、息子はその金を受け取ろうとしない。年に 2 万ルーブルを稼ぎ、金遣いの荒い彼にとって 1500 ルーブルなど端金に過ぎないのである。しかも、父親が必死に貯めたその金は、恐らくどうしようもないことに費やされて消えてしまう。それならば、自分ではなく親戚に渡して欲しいと息子が言うと、父親はせっかく苦勞して貯めたものを無下にされたことに腹を立てて部屋を出て行ってしまう。しかしながら、その怒りもすぐに息子への愛おしさに変化してしまうほど父親は息子を愛している。一度部屋から追い出されており、さらに自分から出て行っていた手前もあって息子の部屋に戻ることに出来ない神父は、最後に玄関で息子の外套がかかっているのを見つけて、それを抱きしめたところで物語は終わる。

この『愚直』に登場する父親は、息子を強く愛している存在として描かれている。一人息子であることや、15 年ぶりの再会であることが背景にあったとしても、最後の外套を抱きしめる場面は、胸を打つものがある。彼は久しぶりに会った息子に、早く寝るように諭したり、嘘をつかないようにと説教をしたりと完全に子供扱いをしている。そこには 15 年間息子に会えなかった彼の思いと、どんなに成長したとしても親にとって子供は子供のままであることが表現されている。

ところが、そうした父親に対して、息子の態度は冷めている。食事中も父親が学問の話や生活について話題にしようとするのに対し、息子の関心は 15 年ぶりに食べる料理にしかない。夜中に部屋にやって来た父親に対しても、山積みになっている仕事の邪魔になるため追い出してしまふ。しかし、この親子が分かり合えないのは息子側にだけあるわけではない、父親も未だに彼を子供扱いし息子が話す内容を冗談だと思って信じない。15 年ものあいだ田舎と都会に離れて暮らした父と子には、その離れて過ごした期間だけ価値観も変わり、見えない溝ができてしまったのである。都会と田舎に離れて暮らす親子というモチーフは、後期の『かもめ』や『ワーニャ叔父さん』に登場する関係であり、そうした親子の関係がこの時期にも書かれている。戯曲においても親子の会話は噛み合わないが、この『愚直』においても父親と息子の会話は悲しいほどに噛み合わない。

この親子を隔てている溝の中で、最も大きなものが金銭感覚である。田舎で 40 年もかけてこつこつと 1500 ルーブルを貯めた神父の父親に対して、息子は 1 年に 2 万ルーブルを稼ぐモスクワ一番の弁護士である。息子は父親が自分のために貯めた金を受け取らないが、都会暮らしで浪費家の彼にとってせっかく父親が貯めた 1500 ルーブルも一瞬の内に使い切られてしまう。強い愛情からの行動も、金に代わってしまった瞬間にその思いは届かなくなってしまう。親子の間に金銭が関わることをこのように表現するのは、チャーホフの一つの特徴であると言えるであろう。『かもめ』や『ワーニャ叔父さん』、『桜の園』では、金銭の不足が原因となり親子の間に隔たりが生まれてしまふが、『愚直』では金銭が満足にあったとしても、良くない結果を生んでしまうことには変わりがない。

そして、この『愚直』においても『一家の父』のように、登場人物を表す言葉に注意が払われている。作品の中で父親の神父は大部分で「父親」（отец）という言葉で表現されているが、彼が息子との会話をやめたり、息子の冗談に対して嘘だと感じたりするときの表現には「老人」（старик）という表現が用いられている¹⁹。ここからチャーホフが父親という言葉を用いる場合、登場人物の行動に注意を払い使い分けていることが分かる。一方、

息子は父親のサツヴァ神父に対して、彼を「父親」とは表現していない。例えば、彼が世話を焼く父親が鬱陶しくなったときに「お爺さん」(старец)²⁰という言葉を使っている²¹。そして、息子は父を呼ぶ際に使う言葉は「父親」ではなく、神父と父親の両方の意味がある「батьа」²²という言葉である。こうして作品の中で彼が一度も父親という言葉で呼びかけないのは、彼と父親との距離を示していると考えられる。

また、使い分けられているのは父親に対する表現だけではない。息子を表現する言葉も使い分けられている。例えば、父親の話を聞いているときには「息子」という表現が使われ、彼が父親の話を聞いていないときには「弁護士」(адвокат)という表現が用いられているのである。こうした用いられた表現の違いによって、2人の関係の移り変わりが繊細に表現されている。

チャーホフは1885年に100篇近く短編を創作しているが、その中で家族関係が描かれた作品は『一家の父』と『愚直』の2作品だけである。そして、その両作品とも『ペテルブルグ新聞』に掲載されている。この1883年から1885年にかけて、家族を題材に扱った作品が極端に少なくなっているのは興味深い点である。

3. 子供の視点

これまでチャーホフの短編作品の中には子供の視点が欠けていたが、この時期になりようやく子供の視点が作品に描かれている。作品に登場する子供の視点を分析する前に、あらかじめこの子供という言葉について説明をしておきたい。

家族という組織の中で、子供は基礎的な構成要素の一つである。しかし、子供という言葉には2つの面がある。その2つの子供の意味の差を説明するためには、対になる言葉を用いると理解しやすい。まず、一つ目が親に対しての子供である。この場合は両親によって生まれた、または養子縁組によって親族関係にある子供を意味している。そして、もう一つが大人に対する「子供」である。こちらの定義を年齢などの範囲で定義することは困難だが、成人していない児童を指す「子供」である（これ以降、大人に対する「子供」は括弧で括って表現する）。

この大人に対する「子供」という概念は、家族関係に組み込まれている親と子供の関係とは異なり、社会環境の変化によって新たに生み出された概念である。中世ヨーロッパでは、子供は母親の介助が必要なくなった時点で、共同体の中において大人たちの仲間入りをしていた²³。しかし、その後16世紀から17世紀にかけて、民衆の教育の必要が説かれるようになると、「子供」の教育機関として学校が誕生する。人間がただ生きるだけでなく、より善く生きることが社会的に望まれるようになったことで、教育という人間形成の手段

¹⁹ ロシア語の「父親」(отец)には、神父を示す言葉としても用いられるため、この「父親」という言葉が職業を示していると捉えることも出来るが、神父を示す場合には「サツヴァ神父」(отец Савва)と名前と同時に用いられて表現され、はっきりと区別されている。

²⁰ 「老人」という意味以外にも、「長老」、「古老」という意味もある。

²¹ Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Сочинения. Том 4. М., Наука. 1976. С. 252.

²² батюшка (神父) の俗語。「父親」の意味もある。

²³ フィリップ・アリエス (杉山光信・杉山恵美子訳) 『〈子供〉の誕生』 みすず書房、1980、384頁。

が発達し、その過程で「子供」という概念が生まれたのである。

この「子供」という概念がヨーロッパからロシアの貴族の間に伝わったのは、18世紀初めのことである²⁴。フランスなどヨーロッパ文化の流行とともに、ヨーロッパ的な家族観がロシアに輸入され、同時にヨーロッパの家族間に含まれていた「子供」という概念もロシアの貴族社会へと浸透していくことになったのである。

「子供」という概念のロシアへの導入は、まず外面的な物質文化の輸入によって始まった。そうした物質文化を象徴していたのが、子供服である。それまでロシアの貴族社会では、大人と子供の衣服のデザインは同じで、違いは服の大きさだけであった。だが、この時代に、子供向けのデザインをされた洋服がロシアに普及し、貴族の子供に着られるようになった。その後、子供服のような表面的な文化だけでなく、子供に対する敬愛の考えやヒューマニズムといったような内面的な文化も徐々に貴族社会へと浸透していった。

こうした18世紀初頭の家族観の変化をもたらし役割を果たしたのが、母親に代表される女性たちの存在であった。当時の貴族の家庭では夫が将校勤めや農業経営などで家を離れることが多く、妻と子供だけが残されていた。そのため、必然的に子供を育てるのは、家に残った妻の役割になり、彼女たちは自分たちの子供をより良く育てるために、より先進的なヨーロッパの家族観を学んだのである。母親は新しい家族についての知識を得ようとヨーロッパで書かれた書物や子供向けの本に親しみ、「子供」の世界を理解し、「子供」という概念がロシア貴族社会に根付くようになったのである。当時、子供たちに読まれた本としては、『ロビンソンクルーソー』や『ドン・キホーテ』のような古典もあれば、ドイツやフランスから輸入されて翻訳された児童書が既に普及し、子供たちに読まれていた。

そして、貴族社会の女性たちが家庭の中で本に親しむようになり、ロシアでも母親と子供を対象とした文学が誕生した。1775年、ロシアにおいて初めての母親と子供を対象とした児童文学雑誌「心と頭のための児童読物」がニコライ・イワーノヴィチ・ノヴィコフとニコライ・ミハイロヴィチ・カラムジーンの2人によって発刊されたのである²⁵。その後、18世紀終わりから19世紀初頭にかけて、ノヴィコフの出版活動により「子供」を対象とした数多くの本が生まれ、読書は子供の成長に大きく関わることになった。貴族の子供たちは本の中で英雄に触れ、善に仕え悪に屈しない騎士の生き方を学びながら成長したのである²⁶。

こうした背景があり19世紀ロシアにおいて、既に大人に対する「子供」の存在は認識されていた。しかし、これまでチェーホフは、この「子供」を全く描いていない。たとえ「生きた商品」のようにミーシャという幼い子供が登場したとしても、親に対する子供でしかなく、大人に対する「子供」として描かれてはいなかった。

これから見ていくのは、その書かれることのなかった「子供」の存在が描かれた作品である。チェーホフが初めて「子供」の価値観を作品で表現したのは、1884年5月5日、雑誌『断片』に掲載された『アルバム』«Альбом»においてである。この短編は、とある祝賀会で部下たちが上官へ豪華なアルバムを贈るという話である。部下たちが贈ったアルバ

²⁴ ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン（桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳）『ロシア貴族』筑摩書房、1997、68頁。

²⁵ 同上。

²⁶ 同上、80頁。

ムには、隊員たちの写真や集合写真など、上司がこれまで部隊で過ごした様々な思い出が詰まったもので、上司は部下たちからの気遣い感動し、嬉しさのあまり涙を流してしまう。その後、祝賀会が終わると、上司は自分の喜びを家族にも伝えようとアルバムを抱えて家へ帰って行く。家に到着すると、ここでも親戚や家族が出世を祝う準備をしていた。そのパーティのさなか、彼は貰ったアルバムを自分の幼い子供たちに自慢して見せる。ところが、子供たちは、アルバムの中身には興味を示さず、父親の歴史よりも美しいアルバムそのものだった。幼い姉弟の姉は、父親が持って来た美しいアルバムを気に入って、収められていた写真を全てはがして自分の写真を貼ってしまう。すると、弟はアルバムから剥がされた写真を見つけ、顔に落書きを始め、さらに一人一人をハサミで切り抜き、兵隊ごっこのおもちゃにしてしまう。そして、弟がマッチ箱と写真で作った兵隊を父親のところへ行くと父親は、落書きをされておもちゃの兵隊にされた部下を見て大笑いしたところで物語は終わる。

この作品では、一つのアルバムを通して、大人と子供の価値観が対比されている。部下たちが上司との思い出を詰め込んで贈った大事なアルバムも、幼い子供たちにとっては単なるアルバムであり、そこに収められた父親や部下たちの歴史が刻まれた集合写真も、兵隊ごっこのための材料の一つである。作品の前半部分では、アルバムを贈るときの部下たちの仰々しい行動や、父親の大きな感動が描かれているが、結末部分ではその感動を呼び起こしたアルバムがあっさりと子供たちによって台無しにされてしまうことで、大人たちの価値観も子供たちには意味をなさないことが示されている。

また、この短編では父親は、大切なアルバムに対していたずらした子供たちを怒らない。これまで描かれた父親は何かあれば鞭での体罰を考えるような人物であったが、この作品に登場する父親にとっては、感動したアルバムや写真よりも、子供たちの笑顔の方が重要なものなのであろう。

この『アルバム』の次に「子供」の視点が見られる作品が、10月27日に同誌へと掲載された『治療・養老院で』«Вприюте для неизлечимо-больных и престарелых»である。この作品には、金を恵んでもらうために祖父のもとへ赴く母と娘が描かれている。

かつて祖父はこの辺り一帯を治めていた大地主であったが、今では家族と離れ養老院に一人で暮らしている。その養老院に彼の息子の妻と幼い孫娘が訪ねてくる。ところが彼の息子、つまり、孫娘の父親は駆け落ちして彼の家を出て行ったという経緯から、祖父の方では息子夫婦を嫌っている。しかし、母親と孫娘は、貧しく食べていくことができず、嫌われていると分かっている上で、祖父のいる養老院までやって来たのである。祖父はやってきた2人に対して、出て行った息子への文句や、自分が大地主だった頃の昔話を長々とし始める。祖父からお金を貰う以外に生活する手段のない母親は、祖父の夫への文句や長たらしい話を我慢して聞いているが、幼い娘は祖父の長い話や地主時代に下僕に行った暴力の話に耐えることは出来なかった。彼女は母親に家に帰ろうと頼み込むが、生活費を恵んで貰うまでは養老院から帰るわけにはいかない母親に促されて、最後まで祖父の話を聞かされてしまう。祖父の話が終わり、金を受け取って帰る途中、娘は母親にどうして祖父のところに来なければいけないのかと尋ねると、父親が酒に溺れ働かないためだと母親が話したところで物語は終わっている。

先ほどの『アルバム』と違って、この『治療・養老院で』では、大人の都合によって振

り回される子供が描かれている。祖父にとって息子夫婦は嫌悪の対象だが、孫娘だけは違う。そして、母親もそれを分かった上で娘を祖父の元に連れて行っている。もし自分一人で行ったのなら、相手にされず金を恵んでももらえないと分かっているのである。しかも、生活がまともに出来ない理由は、父親が働かずに酒ばかり飲んでいるせいであり、孫娘には何の落ち度もない。しかしながら、彼女の家庭状況は祖父を頼らなければ食べていけない状況である。こうした大人の都合によって苦しまなければならないことが、幼い彼女には理解できない。彼女は自分の気持ちに正直に、祖父の元には行きたくないと母親に告げるが、その願いは叶わない。

この作品では幼い孫娘の目を通して見た現実世界がそのまま故に、大人たちの理不尽な世界が鮮明に描き出されている。チャーホフはありのままの世界を描き出していると言われることが多いが、そうした特徴はこうした子供の目を通した世界にも通じている。チャーホフ自身、自分の仕事は問題を解決することではなく、正しく提示することだと語っているが、この作品の孫娘はこれから先も会いたくもない祖父に会わねばならず、そして、家に帰れば酒を飲み働きもしない父親が待っている。大人たちの都合に対して、子供は無力である。

1884年12月6日『目覚まし時計』に掲載された『牡蠣』«Устрицы»において、チャーホフは初めて子供を主人公にした作品を描いている。出稼ぎのために父親と一緒にモスクワへとやって来た幼い「ぼく」の視点で見たモスクワの通りの様子や、行き交う人々、父親の様子が描かれている。

モスクワの大通りに「ぼく」は父親と一緒に立っている。しかし、「ぼく」は腹ペコで今にも倒れそうで、立っているのがやっとである。地方から働き口を探すために出てきた父親と一緒にモスクワへやって来たのだが、父親の働き口は見つからず金も底を尽き、ここ2日は何も食べていない。父親はこのままでは生きてはいけないと思い、物乞いをする決心をしたが、通りを歩く人々を見ているばかりでなかなか施しを乞うことができない。「ぼく」は、そんな父親の隣で空腹に耐えて立って町並みを見ている。もはや空腹も限界で意識も朦朧とし始めたとき、「ぼく」の目に食堂の窓が飛び込んでくる。明かりの漏れる窓の向こうからは、大勢の人で賑わっている様子が伝わってくる。中では食事をしている人が大勢いる。空腹で意識が朦朧としながらも、「ぼく」はどうかして中の様子を見ようと目を凝らす。すると、窓の奥に何かが書かれた張り紙が見える。しかし、字がぼやけてはっきりと見えない。最後の力を振り絞って張り紙を見つめると、書いてある文字が次第に見え始める。張り紙には牡蠣と書いてあった。「ぼく」は、張り紙にある牡蠣なんて食べ物を知らなかったのも、その食べ物がどんなものなのか父親に尋ねる。すると、父親は牡蠣とは海にいる生き物だと教える。「ぼく」は知っている海の生き物を色々と思い浮かべ、牡蠣が魚と海老を足して2で割ったような生き物ではないかと想像する。あの窓の向こうでは、その魚とも海老とも思える牡蠣が食卓に乗り、お客たちに食べられているのだ。「ぼく」は牡蠣を想像して、自分が食べる様子を空想する。牡蠣は、いったいどうやって食べるのだろうか。疑問に思った「ぼく」は、もう一度父親にどんな風にして食べるのか聞く。すると、父は生のまま食べるのだと教えてくれた。そして、牡蠣が硬い殻に覆われた生き物だと付け加える。牡蠣が殻に覆われた生き物だと知ったとたん、「ぼく」の頭の中の美味しい料理は消え失せてしまう。自分の想像した生き物が、殻の中とう

ずくまる蛙のような生き物だと思ったからである。殻を取って、それを生で食べるなんて恐ろしい光景はとても耐えられない。大人たちは生きたまま、その奇妙な生き物を食べてしまうのである。なんて恐ろしい光景なのだろう。けれど、「ぼく」は残酷だと思いながらも、空腹のあまり、自分が食べる想像を止めることができない。もう「ぼく」の腹ペコは、我慢の限界に達していた。耐え切れなくなった「ぼく」は、牡蠣が食べたいと無我夢中になって叫び始める。

どうしても物乞いをするに踏み切れなかった父親だったが、その息子の声にせかされるように、どうぞお恵みをという言葉を通行人に口にする。すると、通りを歩いていた紳士2人が、牡蠣を食べたいと叫ぶ「ぼく」を面白がって親子の前に立ち止まり、一緒に食堂に入っていく。テーブルに座ると早速、牡蠣が注文されて運ばれてくる。殻に入ったグロテスクな生き物を見たくない「ぼく」は、目をつぶりながら、一心不乱に牡蠣にかじり付く。殻にかじり付く子供を見て、食堂にいる人たちは笑い始める。父親が食堂にいる人たちに施しを乞うているのを見て、少年は気を失う。気がついて目を覚ますと、「ぼく」は部屋に戻ってベッドに寝かされていた。部屋では父が何やらぶつぶつ言いながら歩き回っている。

さて、この『かき』という作品だが、物語は「ぼく」が昔を思い出すという形で始まっている²⁷。こうした書かれた物語が過去の思い出という書き出しは他のチェーホフ作品『中二階のある家』や『たわむれ』にも見られるが、この作品に書かれたことが過去であることは、この「ぼく」が父親と物乞いをしていたことが過去であることも意味していると考えられる。

この作品では「ぼく」から見た父親が詳しく説明されている。父親が見栄っ張りなことで、仕事を探しているが見つからないこと、田舎から仕事を探して出てきたことなど、なかなか声をかけようとして出来ない父を「ぼく」は傍らで見守っている。また、父親が貧しくても、汚い格好をしていても、そんな父親が大好きだと「ぼく」は思っている。これまでの作品には親子のコミュニケーションが描かれることはなかったが、この作品では子供から親に対する愛情が描かれ、父親も子供に質問をされると、きちんと答えているように互いに会話が成立している珍しい作品である。聞かれたことに答えるのは当然の事なのだが、チェーホフの作品の中では、これまでの作品で見てきたように親子のコミュニケーションが取れることは珍しい。

チェーホフが描く子供というレンズを通して見たありのままの世界は、大人たちの世界がいかに様々な柵に捕らわれているか気づかされる。これ以降、1885年9月16日の『ペテルブルグ新聞』に発表した『料理女の結婚』«Кухарука женится»で子供の目から見た結婚を、1886年1月20日に同じく『ペテルブルグ新聞』において『子供たち』«Детвора»で夜更かしをする子供たちを描いている。そして、チェーホフは『ワニカ』«Ванька»(1886年12月25日)や『ねむい』«Спать хочется»(1887年1月25日)、『広野』«Степь»(1887年2月25日)といった子供を主人公にした作品を次々に描いているが、作品に登場する子供は、親戚に預けられたり、孤児であったりと『牡蠣』の「ぼく」のように貧しい境遇に

²⁷ Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Сочинения. Том 3. М., Наука. 1983. С. 131.

おかれている。

それにしても、なぜこれまで書かれなかった「子供」を主人公にした作品が、この時期から突然に描かれるようになったのであろうか。この原因を知るために、チャーホフの創作方法に目を向けたい。

チャーホフがどのような方法で小説を創作していたかは、多くの友人たちが語っている。雑誌に投稿する仲間であったギリャロフスキー²⁸は、作品『浮気な女』についてのモデルが、彼らの共通の知り合いだったことを指摘²⁹し、チャーホフが作品に登場する人物を描く際に、身近な人物や自分で観察した人物などをモチーフにしていたことを明らかにしている。また作家仲間のコロレンコ³⁰も回想録の中でチャーホフの短編創作について、チャーホフ本人の言葉を書き残している。「私がどのように短編作品を書くかご存知ですか？　こうやってです」。彼は机に目を向けて、最初に目に入ったものを取りました。それは灰皿だった。そして、それを私の前において言いました。「お望みならば、明日には短編を、題名は「灰皿」です」³¹。このエピソードはチャーホフが身近なものから短編を書いていたこと、瞬く間に作品を創作していたことを示しているだけでなく、同時に何もなかったところから作品を創作するのではなく、何か材料となる対象を用いて短編作品を書いていたことを示している。

このチャーホフの創作方法の特徴を踏まえて考えてみれば、これまで登場しなかった「子供」が作品に登場したということは、彼が多くの「子供」たちと接する機会があったのではないかという考えが思い浮かぶ。では、『アルバム』が発表された 1884 年当時、チャーホフはいったいどのような状況に置かれていたのであろうか。

チャーホフは作家として活動しながらもモスクワ大学で医学を学び、医師を目指していた。1883 年の終わりごろからは、ヴァスクレセンスク市³²のチキノ県立病院で研修が始まり実際に患者を診察している。1884 年 6 月には医学部を卒業して医師免許を獲得し、7 月 14 日から研修地に程近いズベニゴロドの病院で医師として働き始めている。その後も病院で働き続けることを勧められたが、2 ヶ月後の 9 月 3 日には家族の待つモスクワへと戻っている。やはり、大学を卒業してからも作家の収入が家計を支えており、自分だけモスクワを離れて病院にとどまることは出来なかったのである。

さて、この時期と作品を比較して考えれば、病院で医師として働いた経験が、作品に活かされたと考えて間違いのないのではないだろうか。病院には、老人から赤ん坊まで様々な人間がやってくる。特にチャーホフが勤めていたのは地方の病院で、そこに住む多くの人間がやって来ている。その中には、病気になって親に連れてこられた子供たちがいたはずである。医師は患者と接する場合、患者から病状や経過を聞くために、相手の気持ちを理解しなければならない。もちろん、それは相手が幼い子供の場合でも変わらない。むしろ、診察をスムーズにするために子供たちを安心させなければならない。こういった医師とし

²⁸ B. A. ギリャロフスキー（1853-1935）作家、詩人、ジャーナリスト。チャーホフも作品を送った『目覚まし時計』などに投稿していた。また、画家のレヴィタンなどとも交流があった。

²⁹ B. A. ギリャロフスキー（村手義治訳）『帝政末期のモスクワ』中央公論社、1985、46 頁。

³⁰ Y. Г. コロレンコ（1853-1921）、チャーホフと同時代に活躍した作家。1879 年から 1884 年にかけてシベリアに流刑になる。代表作品はその経験をもとにした『マカールの夢』。

³¹ Чехов в воспоминаниях современников. М., Захаров, 2005. С. 208.

³² モスクワの南東 80 キロ、現在のイストラ市。

て子供と接した経験が短編作品の中に子供たちを登場させるきっかけになったのではないだろうか。そうしたことを踏まえてチェーホフに関する文献を調査してみると、医学部に通っている 1883 年の 1 月 22 日から 4 月 7 日にかけて、病気の赤ん坊の治療に病院に通っていること³³、チキノの病院で子供の手術に危うく失敗しそうになったエピソード³⁴など、チェーホフが医師として子供と接していた事実が浮かび上がってくる。

また、チェーホフは医師として働くことを完全に辞めてしまったわけではなく、病院を離れた後もモスクワの家で『医師アントン・チェーホフ』の看板を掲げて診療を行っていた。この診療を始めた 9 月 3 日から、3 ヶ月後の 12 月 6 日に『かき』は発表されている。もしかしたら、チェーホフの診療所に、『かき』の子供のように空腹で倒れて担ぎ込まれた子供がいたのかもしれない。

結論

1883 年から 1885 年という期間に限ってチェーホフ作品に描かれた家族関係の分析を行ったが、そこにはまずこの時期特有である雑誌との関係が浮かび上がってきた。この時期に 250 篇近い作品を残しながら、家族関係が書かれた作品がわずか 10 篇という少なさの意味するものは、検閲だけでなく雑誌『断片』の編集者レイキンとの関係が影響していたと考えられる。学業と執筆活動を両立しながら、次第に短編小説家として名声を獲得し始めたチェーホフだが、この時期は数多くいる短編作家の一人に過ぎなかった。レイキンからの作品に対する多くの注文が、家族という題材を選ぶことを躊躇させていたのではないだろうか。この論文で見た『家庭教師』は、大学の勉強により投稿が滞ったとき再三のレイキンからの注文を受けて、寄稿した作品である（1884 年 4 月 5 日または 6 日、レイキン宛）。つまり、もともとは『断片』に寄稿する意志のなかった作品か、もしくは編集部からの要請でわざわざ書いた作品であるということになる。その作品に家族関係が登場するということは、レイキンの好みに合わないか、チェーホフが『断片』に投稿する予定の無かった作品であると考えられる。こうした投稿先との関係が、家族という素材を使って描くことを避けさせていたのであろう。

また、これまでの時期の作品にも特徴的であった、金銭への嫌悪感は変わっていない。家族関係において金銭を求めることが不幸への扉であり、金銭は家族の隔たりを産むきっかけでもある。叔父への手紙には「私が元気でいれば、家族は安泰なのです」（1885 年 1 月 31 日、叔父ミトロファン宛）と自分が家族を養っていることに対する愚痴を漏らしている。さらに、弟イワンには「お前がモスクワで働いていたら…」（1884 年 10 月下旬イワン宛）と書き送っている。この時期、彼の家族は経済面でチェーホフを完全に頼りにしていた。医師としての収入、作家としての収入があっても、彼が家族の中で経済的に自由になるのは、まだ先のことであった。しかし、彼が自分の家族を重荷に思っていたと簡単には結論づけられない。その証拠に『愚直』では例え経済的に豊かになったとしても、それが原因で分かり合えなくなってしまう親子が描かれている。それゆえ、この金銭が家

³³ Гейзер И. М. Чехов и медицина. М., 1954. С. 25.

³⁴ Мирский М. Б. Доктор Чехов. М., Наука. 2003. С. 27. / アンリ・トロワイヤ (村上香住子訳) 『チェーホフ伝』中央公論社、1992、92-93 頁。

族関係に関わることへの嫌悪は、彼の育った家庭環境だけが影響しているわけではなく、彼が作家として成長していく中で培った価値観の一つなのではないだろうか。

【参考文献】

- Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Сочинения. М., Наука. 1974.
Летопись жизни и творчества А. П. Чехова 1860-1888. М., Наследие. 2000.
Чехов в воспоминаниях современников. М., Захаров. 2005.
神西清、池田健太郎、原卓也訳『チェーホフ全集』中央公論社、1968。
アンリ・トロワイヤ（村上香住子訳）『チェーホフ伝』中央公論社、1992。
池田健太郎『チェーホフの生活』中央公論社、1971。
池田健太郎編『チェーホフの思い出』中央公論社、1969。
井桁貞義監修『はじめて学ぶロシア文学史』ミネルヴァ書房、2003。
浦雅春『チェーホフ』岩波新書、2004。
Евсеев Д. М. «Среди милых москвичей»: Московский быт глазами Чехова - журналиста. М., Гилиос АРВ. 2007.
角伸明「チェーホフの耳と子ども」（田中泰子編『カスチャール』第22号、2005）。
川端香男里『ロシア文学史』東京大学出版会、1986。
久保英雄『歴史のなかのロシア文学』ミネルヴァ書房、2005。
Громов М. П. Чехов. М., Молодая гвардия. 1993.
佐藤悦子『家族内コミュニケーション』勁草書房、1986。
Чехов М. П. Вокруг Чехова. М., Московский рабочий. 1964.
Дворникова Л. Я. Новые псевдонимы А. П. Чехова?// Русская литература. Т. 3. СПб., Наука. 2005.
藤本和貴夫・松原広志編著『ロシア近現代史－ピョートル大帝から現代まで－』ミネルヴァ書房、1999。
フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』みすず書房、1980。
ベールドニコフ（三橋重男訳）『チェーホフの生涯・上下』東京図書、1978。
堀江新二『演劇のダイナミズム・ロシア史のなかのチェーホフ』東洋書店、2004。
マークスローニム（池田健太郎訳）『ロシア文学史』新潮社、1976。
牧原純『越境する作家チェーホフ』東洋書店、2004。
マリヤ・チェーホワ（牧原純訳）『兄・チェーホフの思い出』未来社、1968。
Мирский М. Б. Доктор Чехов. М., Наука. 2003.
ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン『ロシア貴族』筑摩書房、1997。
Лещенко В. Ю. Русская семья (11-19 вв.). СПб., СПбГУТД. 2004.
ロナルド・ヒングリー（川端香男里訳）『19世紀ロシアの作家と社会』中央公論社、1984。